

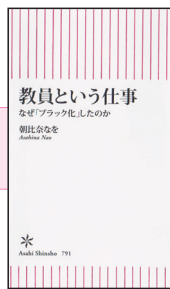


いる。職場の有力者と見なされている教員の中には子分を増やしたい、自分と違う価値観を持つ教員を排斥したいと画策する者もいる。本来、「ムラ社会」には、その集団の構成員の間に信頼感を基にした一体感があり、自然災害や他集団とのトラブルの際には協同して行動するものだが、現代の教員は「ムラ社会」特有の同調圧力が強く、「集団規範」に従わない者、突出した言動をする者を許さない雰囲気はあるが、個々の構成員同士の信頼感がないと言

政府や文科省の提言等では多様性を重視しているのに、現実には正反対の実態があるとして、著者は、物言わぬ人材を育成し

著者は言う。「教員改革」によって教員の同質化が起こり、「ムラ社会」化が進み、教員が追いつめられて

教員という仕事
なぜ「ブラック化」したのか



朝比奈なを 著
869円 朝日新書
☎03-5541-8757

があるのだろうか」と危惧する。本書にもある「異質であることを異常に恐れる雰囲気」が、教育改革を阻害しているのではない。互いの個性を重んじて支え合う支持的風土をつくり出すことこそ、その閉塞感を打ち破るものと評者は考える。

(前聖徳大学教授・西村美東士)

また、著者は、生徒と同様に若い教員も「自分に自信を持って」と言う。そして、「返事はするけど、アドバイスに従ってはやらない」姿勢をしばしば目にしてきたと言う。そして、「勉強はしてきているけど、人からアドバイスももらったこと、教えてもらったこと

たいと考える誰かが「教育改革」に介入しているのではないかと言う。そして、コロナ禍において、「教員改革」も立ち止まって、目指すべき方向を「画一性」から「多様性」に転換し、それが子どもたちの大人像になるよう、養成・採用、研修制度を再考すべきと主張する。